

押し ゲン

Oshi-Gen

能登半島復興の 要の一つ！ 「重要港湾」の修復工事

2024年元日に発生した地震で広範囲が被災した能登半島。陸路が寸断され、思うように復興が進まない今、海上輸送によって支援物資を運ぶための拠点として港湾の復旧を進める現場を取材した。

七尾港（大田地区）岸壁（-10m） （大田2号・物専）（災害復旧） 改良外1件工事

東亜・大本・株木特定建設工事共同企業体

【今月の推し】

- ★ 一刻も早い完成が求められる
港湾拠点
- ★ 建設会社として復旧・
復興に従事することへの“想い”

元日に発生した 能登半島地震の影響下で

二〇二四年元日に発生し、石川県・富山県・新潟県など北陸広域に甚大な被害をもたらした「能登半島地震」。その被災地の一つである石川県七尾市を訪れた。七尾市は能登半島の中央付近に位置しており、地震では最大震度六強の揺れに見舞われて多くの建物が倒壊、断水・停電なども発生した。現在、それらのライフラインはほぼ復旧したものの、今年になってからも震度三以上の余震が頻発しており、市内には半壊家屋も散見された。

今回の取材現場である七尾港では、能登半島地震の影響で損傷してしまった岸壁を修復し、港湾機能を回復させるための工事が行われている。

現場代理人を務める東亜建設工業(株)・小池信也所長に、七尾港の被災状況と工事の詳細をお話いただいた。「能登半島の真ん中辺りに七尾湾があって、七尾港はその南側にある『南湾』に面しています。七

良を施し、その強化した地盤そのもので陸側からの土圧を支える構造とし、倒れてしまった鋼矢板も引き抜いて新たに打設し直すという。「通常は地盤改良や鋼矢板の数量を見積もり、工事価格を算出してから着工するのですが、一刻も早い復旧が必要のため、耐震修復の方針を決め、標準断面にて発注する、いわゆる『概算数量』の状態です」。

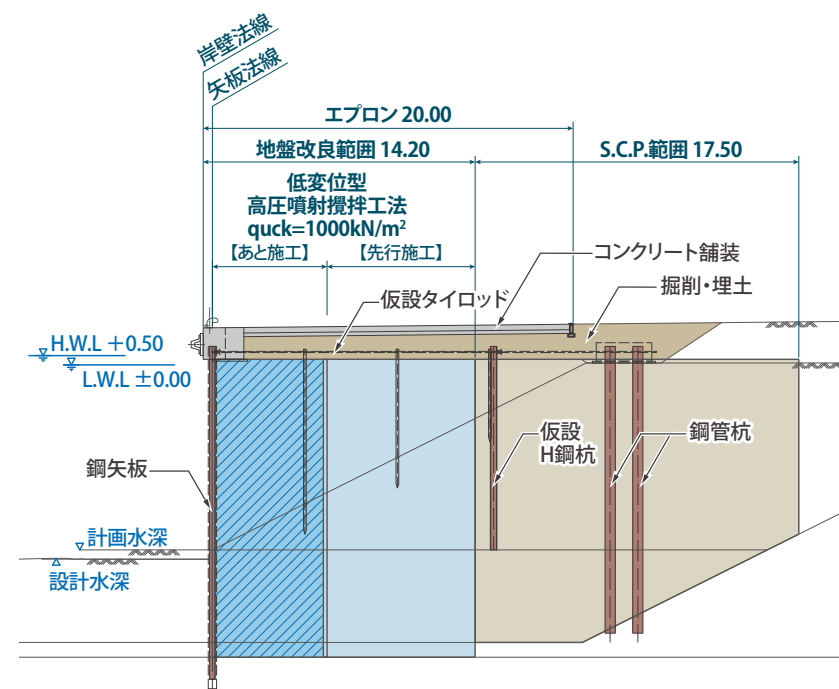
取材時は、より岸壁に近いエリアの地盤改良を高圧噴射攪拌工法（FTJ工法）で実施中であり、六基の地盤改良機がロッドを地中に挿入して、場内プラントで製造したセメントスラリーを地中に噴射している状況だった。

スラリーを噴射すればその体積分の砂泥が地上に噴出するため、それをバキュームで吸い上げ、地上のピットで数日かけて乾燥。その後、排泥をダンプトラックで搬出するというサイクルが粛々と繰り返されていた。「地盤改良としては五〇%ほど進捗したところで、まさに工事が本格化したという段階です」。



柱状の地盤改良機。細長いロッドを地中に挿し込み、セメントスラリーを噴射する

地震の影響で「孕み」が生じている物専岸壁



今回の工事によって耐震化する岸壁の標準断面図。海側の青色の部分を地盤改良で補強し、土圧を支える構造とする（東亜建設工業提供素材を基に作成）



施工位置図。七尾湾は「能登島」によって北湾・西湾・南湾のエリアに区切られており、七尾港はその最奥部にあたる南湾に位置する

尾市の市街地からも近いですね。工事名称にある『大田地区』というのはその七尾港にある埠頭の一つで、この陸側の地盤が地震で液状化してドロドロの状態になり、全長一八五メートルにわたって最大一・七メートルほど岸壁が海側に張り出してしまいました。岸壁というのは真つすぐでないし船が接岸できませんから、これを元の形に修復することがこの工事の目的となります」。

現地を見ると、「物専岸壁」と呼ばれる控え式鋼矢板構造の岸壁が海側に大きく孕んでおり、このままでは大きな船舶が横付けできないことは明白だった。「断面図にあるように、もともとは海から二〇メートルほど離れたところに鋼管杭を打ち込んで、それを控えにして岸壁の鋼矢板を陸側から引っ張り、形状を保つという構造でした。しかし今回の液状化でこの鋼矢板が圧力に耐えきれず海側に傾いてしまったので、この構造そのものを見直して、地盤改良により、耐震機能を復旧することとなりました」。

本工事では、海側から一四・二メートルまでの広範囲にわたって地盤改

復旧工事にかかる想いと 建設業者としての矜持

ここで、東亜建設工業ならびに小池所長自身は発災以後どのように震災とかかわってきたのかを改めてお聞きした。「北陸地方整備局と（一社）日本埋立浚渫協会の災害協定に基づき、弊社は震災直後の一月から三月まで、七尾大田岸壁と和倉港の応急復旧工事に携わりました。現在、港が部分的にでも使えるようになったのはその時の工事によるものです。それから二〇二四年四月、北陸支店内に組織として『能登震災復興対策室』を設置し、現況の調査・把握や、想定される工事内容に対して準備・検討を進めました。その甲斐あって当工事を受注し、本設復旧の工事に携わることができました」。

一方で、小池所長自身は地震発生時は富山県の港湾土木の現場で所長を務めていた。まずはその現場の被災状況確認に奔走し、同年七月に工事が完了。その後、この現場への赴任が決まったという。

この七尾港の復旧工事を担当す



写真奥の3号岸壁は既に暫定利用されており、大型の輸送船が係留されている

から技能者を呼び寄せることになりませんが、大人数を収容する宿泊施設を一つの工事で長期に占有することは困難なので、工事に必要な仮設宿舎を建てました。一日も早い復旧・復興のためとはいえ、技能者やトラック運転手に規定を越える労働時間を強いることはできないので、工期との兼ね合いにも配慮しながら現場を運営しています」。

七尾港は、港湾法で国内外の重要な輸送拠点に指定された「重要港湾」（国内一〇二港）の一つであり、また港則法で喫水の深い船

この現場には七名（四月取材時点）の東亜建設工業職員が勤務しているが、そのうちの一人である長岡志優氏も発災直後から能登半島で応急復旧工事に携わっており、その当時をこう語る。「元日は休暇のため郷里の山口にいたのですが、地震が起きて一カ月後の二月に石川に来ました。主に和倉港で、応急の護岸工事をやっていました。電気や水道が使えず、ホテルもないの

ることが決まった時の心境を問うと、小池所長は自身の経歴を振り返りながらこう語った。「私がこの会社に入ったのが一九九五年、阪神・淡路大震災が起きた直後だったので、入社してすぐに関西の被災地に行きましたし、二〇一一年に東日本大震災が起きた際も橋梁復旧に一年半従事しました。建設業界にいる以上、被災地に真っ先に駆けつけて復旧・復興に貢献するというのは我々の使命だと思っていますので、大変ではあるけれど、こういう時にこそ我々のような会社が世の中の役に立ってるんだという気概も感じながらやっています」。



【工事概要】

発注者 国土交通省 北陸地方整備局
工事場所 石川県七尾市大田町地先
工期 2024年10月31日～2026年3月25日
工事内容 七尾港（大田地区）岸壁（-10m）（大田2号）、岸壁（-10m）（物専）の災害復旧整備及び大田東埠頭用地・工業用地の作業ヤード整備



FTJ工法のオペレーターとコミュニケーションをとる長岡氏（左）。被災地の現場に携われることにやりがいを感じているという



地盤改良機の後ろは工事車両が行き交い、大量に発生する排泥を溜める巨大なピットが設けられている。排泥を段階的に乾燥させるため、ピットからピットへ重機で移し替える作業が続く



東亜建設工業株式会社
七尾大田作業所
作業所長
小池 信也 Shinya Koike

が入りできる「特定港」（国内八七港）にも指定されている。と同時に、今回の能登半島地震の復旧においても重要な役割を担っていることを、最後に小池所長が強調した。「現在大田埠頭は、奥能登での震災がれきや洪水の流木などを受け入れて、県外処分のための船舶への積み込みや、内陸部で使用するための資材の陸揚げを定期的に行っています。こうした大規模な物流を支えることが港湾施設の重要な役割であるため、工期内の完成はもちろんですが、その施設を速やかに本設復旧することは能登全体の復興に寄与するものと思っています。この岸壁の復旧を通して社会に大きく貢献できる自負を胸に、作業所一同、頑張っています」。

限られた人材・機材で 工期どおりの完成を

二〇二六年三月の完成を目指して進められている本工事において、ネックとなっている要素について小池所長に尋ねたところ、被災地特有の事情を教えてくださいました。「課題はやはり人員・資機材の確保です。同じ能登半島でも『奥能登』と呼ばれる北部地域は、応急復旧には対応したものの、寸断された陸路の啓開作業の最中に豪雨で被災するなど復興工事に遅れが生じているようです。物資運搬が可能な道路が比較的残されていた『阪神・淡路大震災』『東日本大震災』よりも物資運搬に苦戦している様子は、現地を見ていないとなかなか伝わらないことでもあります。更に県内の工事関係者や車両の多くがその奥能登の復旧に動員されていて、この七尾周辺での不足が顕著という状況です。そのため、他地域

で基本的に車中泊でした。こういった非常事態の現場というのは経験したことのないものでした」。